

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開および委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会 議 名	第 3 回屋島会議
開催日時	平成 2 4 年 1 月 2 2 日(日) 1 2 時 0 0 分～1 4 時 0 0 分
開催場所	高松市役所 1 1 階 1 1 4 会議室
議 題	(1) 屋島活性化の基本的方向性について (2) 基本方針(案)について
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	植田委員(会長), 松村委員(副会長), 池田委員, 井上委員, 岩佐委員, 上杉委員, 小川委員, 喜田委員, 木太委員, 竹内委員, 新谷委員, 増渕委員, 蓑委員
オブザーバー	文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官, 国土交通省四国運輸局企画観光部観光地域振興課長, 環境省中国四国地方環境事務所高松事務所長(代理), 香川県環境森林部みどり保全課長, 香川県商工労働部観光交流局観光振興課長, 香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課長(代理), 香川県観光協会会長, 高松琴平電気鉄道株式会社常務取締役, 屋島山上観光協会会長, 四国民家博物館理事, 香川大学工学部長
傍 聴 者	2 人
担当課および 連絡先	企画課 839-2135

審議経過および審議結果

会議を開催し、次の議題を協議し、下記の結果となった。

議 事

(1) 屋島活性化の基本的方向性について

(資料に基づき、屋島活性化の基本的方向性についての説明の前に、参考資料について説明。)

(事務局)

(1 ページ) 屋島活性化の基本的方向性について、前回の会議で、委員の皆様からの主な御意見等を記載。

(3 ページ) 基本構想策定の基礎データの一つとして、11 月 21 日から 12 月 2 日までの間、20 歳以上の高松市民 1,000 人を対象に郵送により実施した市民意識調査の結果を記載。回収率は、34.7%、年齢別回答者数は、60 歳以上が約半数を占め、若い人ほど回答が少ないという結果となっている。

(4 ページ) 調査に当たっての質問内容を掲載。

(5 ページ) 問 1 の屋島への訪問回数は、「ほとんど行ったことはない」と言う人の割合が最も多く、次に、年に複数回という回答が多い。問 4 の屋島山上への交通手

審議経過および審議結果

段では、自家用車が最も多く、シャトルバスと回答した人は、2.3%にとどまり、公共交通を利用したアクセスが少ない状況である。

(6 ページ) 問 6 の屋島が国立公園であることや、史跡天然記念物に指定されていることの認識について、瀬戸内海国立公園であることを知っている人は7割を超えているが、史跡天然記念物に指定されていることを知っている人は約4割にとどまっている。特に、年齢別を見ると、若い人は指定を知らない人が多く、屋島の価値の継承が課題である。問 7 の屋島の魅力は、屋島からの景観と回答した人が他の項目の2倍の割合となっており、屋島からの眺望が、市民を惹きつける大きな魅力であることが推察される。

(7 ページ) 問 8 の屋島の見所について、まず、「認知度」では、屋島寺、屋島神社および参道、四国村、新屋島水族館が8割を超えた一方、獅子の霊巖や北嶺の遊鶴亭などの認知度は低く、屋島全体としての魅力が十分市民に認識されていない状況となっている。次に「訪問歴」では、実際に行ったことがある場所は、屋島寺、長崎の鼻、屋島神社等、四国村、新屋島水族館が主な場所で、これらが屋島における集客能力を有する主な施設等と言える。問 9 の現在の屋島の施設等については、全体的に更なる充実が求められている。

(8 ページ) 問 10 の活性化に必要な施設では、案内所（インフォメーションセンター）や博物館（ガイダンス施設）など、屋島の魅力や情報を発信する施設の充実が求められている。問 11 の屋島ケーブルに関する質問では、再開された場合、利用する、しない、わからないが、それぞれほぼ同率となっている。最後の問 12 で屋島の活性化についての質問では、理由は様々あるが、約8割もの人が活性化を望んでいるという結果となっている。

8 ページの右側から 10 ページにかけて、一層の活性化が必要と答えた人の理由の主なものを記載。主なものとしては、寂しい、暗い、怖いなどマイナス要因の改善、施設の充実、道路関係、景観（眺望）のよさのアピール、地域のシンボルであり貴重な資源であること、情報戦略の必要性、後世への継承、観光地としての期待などが挙げられる。現状でよいまたは活性化の必要はないと答えた人の理由は、活性化による自然破壊への懸念（自然を残してほしいということ。）が多くを占めている。

(11・12 ページ) 問 13 で、実施して欲しいイベントなどの質問では、自然や歴史など、屋島の特性を生かしたイベントや、子どもや家族で楽しめるもの等が多く挙げられている。

(13～16 ページ) 問 14 の、自由意見記載欄への記載のうち主なものとしては、屋島山上に行くに当たり、料金が発生することについて、寂れた印象を与えるものの撤去、また、整備して欲しいものとして、交通手段や、食事場所、トイレ等便益施設、子どもが楽しめる施設などが挙げられている。

また、施設整備を含めた情報発信の必要性、歴史・自然を生かすことなどの意見も多く寄せられている。

(17 ページ) 昨年 10 月 9 日から 11 日までの間、来訪者実態調査として屋島山上で実施した、来訪者把握調査と対面方式によるヒアリング調査の結果では、来訪者は、3 日間を通じて、7 割以上が県外からの来訪者で、県内でも約 7 割が市外の人であり、屋島はまさに観光地であるということが出来る。

審議経過および審議結果

(18 ページ) 来訪目的は観光、お遍路という回答がほとんどを占め、観光のうち、新屋島水族館に行く人が多くの割合を占めている。

(19 ページ) 滞在時間は、30 分程度の割合が最も多く、短時間の滞在傾向となっている。屋島の認知度についても、瀬戸内海国立公園であり、史跡天然記念物であることを知らない人が、ほとんどという結果となっている。

これらの調査結果等も踏まえて、次に、『第3回協議用資料』「**1** 屋島活性化の基本的方向性について」について説明。

(協議用資料1ページ) 資料の構成は、左側が今回御協議をお願いする内容で、右側に前回のものを参考として記載している。

まず、屋島活性化の基本的方向性のうち、(1) 屋島の位置付けについては、屋島は、瀬戸内海国立公園であることや、天然記念物に指定されていることに着目した「ア 貴重な自然環境と良好な眺望」、また、史跡の指定を受けていることや四国霊場、山麓部や平地地区など人々の生活の地でもあることに着目した「イ 生活・生産と歴史・文化・信仰の地」と位置付けることができる。そして、これらを総合的に保存・活用することで、屋島に親しむとともに、知的欲求を満たすことと、観光を融合させた「文化観光」を創造し、そのシンボルとして屋島を位置付ける。

「ア 貴重な自然環境と良好な眺望」、「イ 生活・生産と歴史・文化・信仰の地」を保存・活用することにより「文化観光」の創造につなげていくことが、恒久的に屋島を高松市のシンボルとして位置付けることになる考える。

(2 ページ) 視点ごとの分析として、前回の委員皆様の御意見や市民意識調査結果等を踏まえ、「ア 貴重な自然環境と良好な眺望」、「イ 歴史・文化・信仰」、「ウ 「文化観光」」の創造という3つの視点からの分析を行い、それぞれ下線の項目を追加することとした。

なお、「文化観光の創造」の項目に、アクセスについての分析を入れているが、アクセスは、観光にとって重要なポイントであると考え、この項目に分類している。

(3 ページ) 今後解決していかなければならない課題として、総合的課題と個別的課題、共通課題に整理している。

総合的課題として、「ア 屋島全体の自然環境、景観および文化財の調査・把握・活用」、「イ 市民の屋島に対する価値の認識と愛着の醸成」、「ウ 屋島の持つ魅力の顕在化と屋島の活性化」として位置付けている。個別的課題として、「エ 廃屋撤去後の更地の利活用策」、「オ 水族館の老朽化」、「カ ドライブウェイを含む屋島山上へのアクセス」、「キ ケーブルまたはケーブル跡地、ケーブル跡施設の取り扱い」として整理した。それらすべてに共通する課題として、「自然環境・景観等の保全」としている。

基本構想策定に向けての進め方として、上記の屋島の位置付けや課題を踏まえ、「① 屋島の特性・価値の保存と顕在化」についての議論に基づき、「② 屋島の有する課題の解消」を図っていき、その際には、「③ 新たなアイデア(メニュー)の展開」が必要になってくるといった観点で進めていきたいと考えている。

(会長)

屋島活性化の基本的方向性について、御意見、御質問をいただきたい。

審議経過および審議結果

(委員)

アンケートの結果について、認識度が一番の重要課題ではないか。ほとんど行ったことがないというのが 51%というのは、あまりにもひどい結果である。ケーブルの問題など様々な問題があるかもしれないが、それ以前に、まず広報を徹底的にやって、屋島の素晴らしさを市民全体にまず知ってもらうことが先決である。前回の会議でも意見が出たが、市全体がもう少し努力して、学校の遠足などにより、子どもたちを連れてくることから始めないといけない。

(委員)

1 ページの方向性に関して、文化観光を創造して、県外・市外から人たちを集めることはできるかもしれないが、一番大きいのは高松市のシンボルということで、高松市民にとってどのように価値付けを上げていくかということがある。広報もあるが、その部分の方向性が弱く、もう少し明確にしないといけないのではないか。

3 ページの総合的課題、個別的課題、共通課題は、前回に比べるとすっきりしてよいが、総合的課題と個別的課題がどうリンクして、個別の対策が明確になっていく必要がある。それは、県外、市外の方へのアピールの仕方についての議論もあると思うが、市民に、どのようなアピールの仕方があって、だからこのような整備という位置付けをもう少ししていく必要があるのではないか。歴史、地域、景観という立場では、1 ページのイ) のところをできればいいと思う。

全体的には、市民と観光客というのは、両立なのか分けるのか、そこは課題だと思う。

(委員)

二人の委員が指摘したように、前回までの議論の中でも、屋島のファンづくりとか、担い手の育成ということが多く出ていた。総合的課題の「イ) 市民の屋島に対する価値の認識と愛着の醸成」という表現は、もう少し議論があってもいいのではないか。もっとリアルに屋島が様々な経緯に基づき、事業を展開していく上で、勿論、外から迎える方の力、知恵も必要であるが、まず、地域の中で担い手づくり、ファン層を地域の中でつくっていかないといけない。年齢が高い人は行っているが、市民の 50 数パーセントは行ったことがないということである。数年前から遠足もやめてきたという背景もあるが、屋島をランドマークとして位置付けるのであれば、もう一度学校教育の中で作り直す必要があり、総合的課題の中の大きなテーマではないか。

(委員)

総合的課題の中の、「イ) 市民の屋島に対する価値の認識と愛着の醸成」に関して、市民というよりも、国民の 7 割が屋島とか栗林公園を知らないというデータが、昨年 12 月ごろの四国新聞に大きく載っていて寂しく思った。今、うどん県ということでやっているが、全国の 7 割の人が屋島を知らないということである。

昨日、サンポートで開かれた「美しいまちづくりシンポジウム」で、市民にとって、屋島はとても大きな財産であると、講師の先生が話をされたようである。このデータのように、市民の 5 割の方が屋島に行ったことがなく、行った人は高齢者が多いのが現状である。正月に屋島に参拝し、その際、歩いている人に、何回、屋島に来てみようと思うかと聞いたら、特に若い人は、ドライブウェイの料金が高すぎて、行きたい、夜景を見たいと思っても、料金まで払ってまで見に行かないとのことであった。場所

審議経過および審議結果

は違うが、下笠居から坂出への有料道路は、料金が無料になると、非常に交通量が増えたとのことである。そのように、みんなの屋島に行きたいという気持ちは、ドライブウェイを無料化にすべきということだと思う。

また、廃墟だったところが何か所かきれいになっているが、子どもたちは、この場所には、遊園地とか、子どもたちが遊べるものができることを期待しており、環境を崩さずに、子どもたちが自然に親しめるようなものができたらいいと思う。

(委員)

屋島会議について、いろいろ難しく、分かりにくいといった意見も出ている。屋島会議は、今回3回目であり、まだまだ結論は出ない。まずは、分かりやすい屋島会議、抽象的でなくて、中に入っていくような会議になったらいいと思っている。

例えば、掃除など、屋島の中ですぐできることと、時間をかけてやっていかなければならないことに分類して、マップづくりなどのすぐにできることは地元のみんなを動かしてやっていきたい。みんなを動かして、その後、私がこの会議で報告することもできるので、そのようにやればよいのではないか。ケーブル跡地の活用や箱モノなど、大きなことは時間がかかる。そういう意味で、少しわかりやすく分類していくこともいいのではないかと思う。

(委員)

小学校、幼稚園、保育所などが、遠足で、屋島、栗林公園に行くための資料が少ない。例えば、保育所向けに資料の漫画化などを検討して欲しいという意見もある。

アンケートを見ると、屋島の認知度は、1番が四国民家博物館、2番が屋島寺、3番が水族館というように、あるものでしか認知されていない。瀬戸内海国立公園や史跡であるということに関しては、みなさんの意識は非常に希薄である。国立公園、史跡や天然記念物という言葉自体が死語のようになってきており、今の世情では世界遺産という方が、ネームバリューがある。四国八十八か所を世界遺産にしようとする四国四県でがんばっており、それならば、その中の屋島寺を四国八十八か所世界遺産に結び付けて、屋島のネームバリューを上げていってはどうか。ハード整備などは、向こう10年から30年スパンで考えないといけない。近いところで改善しなければならないものもあるが、大きな目標に向かってやっていくため、まずは資料づくり、次に地域の県民の運動づくり、それから四国四県共同でやっていかないと、いつまでも同じことになる。

アンケートを見ても、同じようなありふれた結果しか出ていないのが、非常に残念である。例えば、和歌山の熊野古道では、今回の災害ですごく傷んでいるが、それでも観光客数が大きく減っていない。この前見に行ったが、熊野古道は都に近く昔から、天皇、上皇などが御幸されたという資料が非常に豊富にある。それらをもとに、形、表現を変えて、次々と資料がつくられている。また、ボランティアガイドの90%以上がよその方で、県外の方がガイドをかけて出ている。私も含めて、日本人というのは、自分の地域の宝物を認識できないのかなということを感じた。そういうところを一つずつ取り上げてやっていけば、幸い、高松市は転勤の方が多く、県人会や観光アンバサダーとか、県外向けに宣伝してくれる方も多くいる。そのようなことも含めて、今後どういう方向へ持っていくのかということも考えていければいいと思っている。

審議経過および審議結果

(委員)

市民の意識調査、アンケートの結果には、活性化を望んでいる方、また、反対という意見もある。特に反対という方の意見をよく考えてみると、活性化を望んでいないのではなく、活性化という言葉のイメージの捉え方の違いではないかと思う。今まで活性化というと、素敵なイベントをしたり、箱モノをもってきたりとかであったが、そういうことには反対なのだと思う。文化遺産としての屋島ということは、おおむね認めており、大きく変えて欲しくはないが、広報活動やボランティアガイド、環境整備などの足りないところ、派手ではなく丁寧に修復などをして欲しいという意見ではないかと思う。屋島会議でどういう方向でやろうとしても、とにかく単発ではいけない。そのことを念頭にどのような改革をしていくにも、何十年もかけて衰退したものは、何十年もかけて修復していくという、粘り強い地道な活動を、今から具体的に一つ一つ検証していき、何かからでも始めていくということが大事であると、アンケート調査を見て感じた。

また、これまで話題に出ていなかったが、屋島はどこが玄関なのだろうということをご数か月考えていた。高松で生まれ育っているのだから、屋島に登ると言えば、琴電の屋島駅から歩いて、ケーブルの駅まで行き、ケーブルに乗って上に上がっていく。そこから参道を回って、血の池や屋島寺を回るというのがイメージとしてあった。その頃の屋島は、琴電の屋島駅、あの参道から行くのが入口かなというイメージがあった。そのイメージが、今はドライブウェイに変わりぼやけていき、そのことが登るといふイメージがつかめない要因ではないかと思っている。アクセスについての議論もする中で、登山口がたくさんあるというのもよいが、やはり玄関はどこという「顔」も工夫してつくっていく必要がある。

(委員)

総合的課題として、例えば、観光は観光、文化振興は文化振興というような行政の縦割りの中で、政策や予算が動いて展開されてきたと思う。今後は、一体的に取り組んでいく組織、戦略本部みたいなものがあって、そこが複合的、横断的に事業を行う組織体系が、民間、市民の方を巻き込んだ中でないと、ベクトルだけ示して、展開は前と同じようにばらばらでやっているようでは、やはり大きな成果が出てこないと思う。総合的課題の中にはそういう運営体制の作り直しということもきちんと盛り込んで、横断的な展開ができるような組織をつくっていく必要がある。

(委員)

例がよいかわからないが、今年で25回目となった、クリスマスの冬のまつりは、初めはダメだったが、みなさん協力して今は盛大になっている。1週間の期間中、みなさん一生懸命やっている。これと同じで、この屋島会議も、一朝一夕で、いろいろと言ってもなかなかできない。この中で、すぐに簡単にできるもの、例えば、トイレが少ないという指摘もあった。現在、みなさん30分位しか滞在していないが、トイレの掃除をすとか、ベンチをたくさん置くなど、簡単なことから進めていった方がいいのではないか。

(委員)

自然と生活、あるいは歴史・文化・信仰の地、この2つを踏まえるべき基本的な柱とするというのは的確であると思う。その後で、文化観光を創造して屋島を活性化す

審議経過および審議結果

るということで、問題は、活性化させるべき屋島とは何かということである。屋島の存在がバックボーンにあり、その外側を含めた活性化を目指していくのかということであると思う。私自身は、屋島そのものを活性化させるのではなくて、もっと広い視野でつくられているのであると理解している。

先ほど世界遺産の話があったが、日本が世界遺産条約を批准して20年になるが、日本が世界遺産の発想で学んだことは、非常に価値ある遺産をきちんと守りながらより環境を向上させて、将来に継承していくコアの部分とそれを満たす周りのゾーンに分けて、しかも、周りにバッファ（緩衝帯）をとって、開発を一定程度規制し誘導しながら、コアの部分の環境を良好にしていくという、方向性を示すだけではないということも学んだ。言い換えれば、価値を保存して、そのものを、訪問者自身が活動で活かしていくことも含めて、多様な活かし方を考えていくゾーンと、その外側に、アミューズメント機能を持つような施設を持って行って、本質的な価値に附則するものとして活性化を図っていくという発想である。ジオパークの発想も基本的に同じであると理解している。屋島もそういう方向性を目指すべきではないか。

かつてのように、何から何まで屋島の上の方で勝負をするのではなく、屋島があるということによって、この高松全体がどれだけの効果、影響をさまざまな面で実現できるのか、受け止めることができるのかということが大切である。この点から、活性化の資料として出されている、史跡天然記念物の屋島の管理計画の方では都市計画などを参考にしながら、山上地区、傾斜地地区、一番下の市街地、埋立地を、ある部分、利用度に応じた使い方による分け方をして扱おうとした。そういう発想は、今から考えると、適切な発想として活かせるのではないかと思う。

屋島の活性化について一番効果的な、早くできるもの、あるいは時間をかけてやらなくてはならないという意見があったが、もし、認知度という問題が、屋島の活性化そのものに大きくかかわっているとすれば、屋島の価値をできるだけ大勢の市民にわかしてもらい、屋島と自分との距離をもっと近くして、様々なことを考えてもらえる機会が保障されることが大切である。そのためには、アクセスの多様性が保障されることである。その点から、有料道路があるとアクセスがしにくいという意見があるというのは、市民の感覚として出てくる意見としては、それなりの理由であると思う。ただ一方で、有料道路があるから事故が起きない、あるいは、夜間事件などが起きないという管理面での保障があるのかもしれない。

もう一つは、先ほど言われたように、屋島の正面の“顔”というのはどこなのか。地元の方や観光客は、参道が上がっていくが、反対側の遍路道は放置された状態になっている。歩いて登りたい人、あるいは遍路の体験をしたい人、例えば、朝早く屋島の上から、上がる朝日を見てみたい、あるいは夕日を見てみたいなど、様々な使い方に応じてアクセスが自由にできると、認知度、利用度がかなり上がってくるのではないかと思う。

(委員)

先ほどの意見に賛成の部分が多い。やはり、一番大事なものは、屋島の姿だと思う。その姿を壊さないためにも、上にアミューズメント的なものをつくらずに、神聖な山として、みんなが崇めて山に登る。ケーブルカーやハイウェイなどそういうものなしで、自分で行きたくなるような、そういう屋島にしていきたい。全体的に植物園的な

審議経過および審議結果

ことを今考えている。山全体を植物園にして、みんなが山に登って夕日を見ることの神聖さ、形の素晴らしさがずれてきている。それを壊さないような運動して、人が屋島に上る方向に行くのが一番いいのではないか。最初の会議で言ったが、外に舞台をつくって、あの姿を見ながら能でもやって、中はそのままずっと保存してほしい。

(会長)

オブザーバーの方で御意見がありましたらどうぞ。

(オブザーバー)

50年以上前に中学校の修学旅行で屋島に来た。ケーブルに乗って山上に来て、あまりの美しさに驚いた。その後、北嶺にも行って、遊鶴亭から長崎の鼻まで行って引き返してきたり、何回も来ており、地元の人以上に知っていると思っている。

修学旅行の一大拠点であったあの成功体験から、結果的にまだ抜け出ていないのではないか。屋島を活性化していくならば、知名度を一気に上げていく必要がある。もちろん県民に浸透することも大切であるが、もっと広く大きく一気に上げる方法としては、前回にもあったが、今や世界的に有名になった瀬戸内国際芸術祭と連携をするということが大事である。屋島は第1回では会場になっていない。市民、県民、日本国は大切であるが、一気に、東アジアを始めとした世界を相手に、世界の屋島として、市民と県民のシンボルでもあるが、日本のシンボルという捉え方をしていくべきではないか。個人的見解であるが、みなさんに賛同を得られるならば、いろんな場面で話をしていきたい。

第1回の瀬戸内国際芸術祭は、平成22年7月19日海の日から105日間、瀬戸内の7つの島と高松市沿岸部で開かれ、予定の3倍以上の93万人の方が全世界から来た。この中で70%という数字があって、屋島には若者が来ないということだが、7割が若者だった。そして、7割が女性、7割が県外、ということである。第2回は、やり方を少し変えて、同じ100日だが、春、夏、秋に30日余りずつとなる。第1回は真夏の猛烈に暑いときに、105日やって93万人来たが、今度は、春、夏、秋となり、島々はシーズンごとにいろんな花が咲くなど、これは非常にいいことになる。第1回の瀬戸大橋から東側の7つの島に、西側の、柿本人麻呂で有名な沙弥島、元々アートの島らしい北前船の島である粟島、伊吹島、本島が加わる。

この中で、屋島と瀬戸内国際芸術祭をどう連携させるかということだが、今年はNHKで平清盛が放映されており、瀬戸内海が出てくる。本州側では、福原、宮島、そして非常に元気な下関の壇ノ浦である。やはり、この瀬戸内海時代に四国側の瀬戸内海、そして屋島、檀の浦、船隠しなど多くの遺跡があり、これを売っていく必要がある。芸術祭の本番は来年だから、今年は瀬戸内海時代に合わせて、プレをやってはどうか。市民、県民のみなさん総出で、屋島のいろんなところで鼓笛隊、吹奏楽団、模擬騎馬合戦など、いろんなことができると思う。市民、県民の距離が遠いのであれば、季節のいい時の1日か2日、県民、市民をあげて、平清盛でブームになっているこの時に、芸術祭のプレとして、高松市が中心に、瀬戸内国際芸術祭実行委員会も応援する形で思い切って盛り上げてはどうか。

また、2013年に本番の瀬戸内国際芸術祭となるが、今のところ屋島は入っていない。ぜひ、屋島も本番の芸術祭の拠点の一つに入れるべきだと思っている。どのようにするかは実行委員会、アーティストが考えればよいが、屋島に何回も上がる中で一

審議経過および審議結果

つ見落とされているのが、一番景色のいい談古嶺のところである。れいがん茶屋などからの眺めも素晴らしいが、本当の屋島の歴史、文化が見えるのは談古嶺である。談古嶺からケーブル口まで歩いて行くと、約 20 年前に廃業した大きな旅館が残っており、そのまま使えるとは思えないが、このようなところは現代アートとして捉えると面白いのではないか。そもそも現代アートをやっているのは、島の廃屋や岡山の犬島の製錬所跡など全部廃墟であり、それを上手にアート化している。そういう意味で捉えていくとあの辺りも面白い。廃止されたケーブルを復活するのは大変だと思うが、山上駅は素晴らしいアートになる。ケーブルも昔のまま止まっている。道すがら誰ひとり歩いていないが、非常に素晴らしい風景であり、まさしく歴史ロードである。長崎の軍艦島は、歴史を感じる場所であり、急に有名になってきた。それとは違っても、眼下に源平の古戦場が見えるきれいなルートができる。降りてしまえば住宅地で、屋島の上から見るのが一番美しい。そのようなことを踏まえて、この 2 キロを勝手に「廃墟ロード」と名付けているが、芸術祭の本番には素晴らしい芸術ロードになるのではないか。

四国村は、山の上と山の下とで連動すべきで、周辺も含めたという話もあったが、四国村だけでは弱く、山の上と連動して初めて活性化していくと思う。

一気に知名度を上げて、世界に出ていった方がよい。

(オブザーバー)

四国村について 2 つ紹介したい。淡路島の南の方で瓦を焼いている瓦マンと呼ばれる山田さんという方がいて、アメリカの工科大学の学生たちが毎年見学に来ていた。建築系の学生で、京都・奈良、大塚美術館、イサムノグチ先生の庭園美術館、四国村、直島、倉敷を回るツアーの中で、一番評判がいいのはどこかということ、山田さんが言うには、四国村ということで、意外な話だった。1 か所で日本の古い民家、生活ぶりが勉強できるということは、非常に評価が高いとのことである。先ほどの世界的な視野からすると、古民家が 1 か所に集まっている施設は非常に価値があり、逆の発想から見ると非常に面白いという評価であった。

山田さんは昔、九州の湯布院に住んでいて、湯布院が今のような観光地になるかなり前、湯布院の街の若者たちが山田さんを囲んでお酒を飲みながら、自分たちの村の将来を話していた。そこで、今の湯布院の原点が形成されていったという歴史がある。

私たちは、一体どこからきてどこへ行くのかということを考える場所として、屋島の山上に上がって瀬戸内海を見て、きっと香東川が、高松の街を流れていたのであろうが、生駒さんが城をつくって、やがて松平さんが来て、高松ができていったということを一望できる。私たちの故郷を見る場所とすると、屋島は本当に素晴らしいビューポイントである。もっと長い目で、瀬戸内海の海の道筋を見る場所としても最高の場所ではないか。私たちのいる街を知る場所として、屋島の山上は本当に素晴らしい場所だと思うが、ただ見て感じてもらうだけではなく、もっと語りや体験が必要であり、これから、ボランティアも含めて、そこで何を感じてもらうのかを中継する役目などが非常に重要になってくる。

「新たなアイデア（メニュー）の展開」として提言したい。アーティストは未来を見ている。屋島の素敵さを、彼らの目でしっかり見てもらい、少しのエッセンスでよく、巨大なアートをつくる必要はないが、*アーティスト・イン・レジデンスのよ

審議経過および審議結果

うなことを地道にやって、屋島の魅力を彼らの視点で少し発表してもらえる機会ができれば、屋島はもっと世界的な面白い場所として生き返っていくのではないかと。是非、屋島の山上で、作品を置くだけでなく滞在してもらい、新しい魅力をアーティストが発見するような、そのような時間が組めれば良いと思う。

(※アーティストが一定期間滞在し、創作活動ができる施設や機関)

(オブザーバー)

大学の研究者が、それぞれ個々には屋島の、特に自然環境であるが研究してきたが、それを総体としてまとめきれていない。ここにも体系的に、調査されていないということが書かれているが、まさにその通りで、研究をやっていこうとしている。

屋島の活性化という時に、山上にたくさん人が来てくれて、お金を落としてくれることをみなさんが期待しているのか。麓まで含めて賑わいのあるところ、静かに楽しむところ、そういうところを含めて屋島の魅力はあるのではないかと。

屋島の植生は、かつて海岸は白砂青松だった。今、松は古いのは残っているが、後継樹は全くなく、常緑の灌木が埋め尽くしている。昭和50年の環境庁の調査で、屋島は90%が松林であったが、10年前の調査では松林は10%なく、今は数パーセントしかない。春の桜、秋の紅葉がきれいだが、恐らく数十年後には、常緑広葉樹で季節感のない森になっていくことは、たぶん間違いないと考えている。

香川大学の長谷川教授が、地質学的に、屋島のでき方に非常に注目しており、そういう意味で、ジオパークなどについても、今後研究してくれることになっている。

四国村は好きでよく行っている。また、海岸沿いに少年自然の家もあり、高松の小中学生は必ずそこへ行っているはずであるが、そこから上に行くということが少ないのではないかと。屋島総体として考える必要がある。

一番重要なのは地形であり、歴史文化では、屋島の源平合戦があり、屋嶋城が新たに発掘されている。屋島の活性化は、そういう意味で歴史文化と自然地形を生かしながら、しかも、麓を含めて賑わいがあるという方向にいけば良いと考えている。自然環境の調査ではお手伝いできると考えている。

(オブザーバー)

屋島は、国立自然公園、史跡、天然記念物であるが、戦前、文化庁は、名勝に指定しようとしたが、昭和9年に、国立自然公園として位置付けられ、文化財としては史跡天然記念物になった。国立公園は自然公園という性格が強く、多島海風景やここからの眺望などを景観調査として位置付けることが不十分だったのではないかと。文化庁も名勝という指定から外れたため、景観が大事という認識はあったが、その部分の調査はされておらず、屋島で一番大事なものの調査が抜け落ちていると言える。史跡指定の要件であった屋嶋城の調査も十分に行われておらず、先ほどの意見のように、熊野に完全に負けている。資料も十分でないので、屋島の魅力を十分語るができないのが現実である。県や高松市の方々には、失礼を承知で、「昭和9年段階」と言っている。

課題としては、短期・中期・長期の課題を明確にすることから始めることとなるが、先ほどの動線の問題や運営組織の問題も、この基本方針が固まった段階で当然出てくるべきことであるが、ここに位置付けられているように、昭和9年の段階で目指した総合的な価値、史跡・名勝・天然記念物の3つの要件を備えているのが屋島であり、

審議経過および審議結果

全国でこの3つを受けている文化財は一つもない。屋島にはそういう潜在的な価値があるということを確認していただいて、その潜在的な価値を掘り起こして、市民や県内外の方々に知ってもらいたいのではないかと。

(オブザーバー)

屋島へのお客様には、琴電屋島駅まで電車に乗ってもらうほか、ドライブウェイやその他のアクセスなど、皆様のおかげで仕事をさせてもらっている。

2つ、お願いを含めて申し上げたい。

1つ目は、アクセス等々の経営を見通すに当たって、短期的に屋島がどうなっていく、どうすべきなのか。長期的に時間のかかることが当然あって、それが屋島を大きくしていくことになるのではないかと考えている。芸術祭を利用して爆発的に知名度を上げるということは、日々、お客様から料金をいただいている企業としては、非常にありがたい話である。

いろいろなことをやろうとすると、非常に時間やお金もかかるということは、屋島で商売をしていて、非常に強く感じており、きちんと提供できないことに反省もしている。今減っているとはいえ、屋島に来てもらっているお客様がいるということは、大事にしなければいけないとされている。そういう意味で既存の屋島山上の施設であるが、屋島寺さんとか、水族館など、市民の方々に関心を持ってもらっていることは非常にありがたい。

委員の方々のアイデアをパッケージにしたときに、資源の程度、お金の始まって、様々な経営資源がどこにどのように配分され、どの程度期待し、どの程度自分たちで頑張っていかなければいけないのか。施設整備の面から、短期的な部分と長期的な部分に分けて明確になると、経営を預かっている身としてはありがたい。

もう一つは、過去からずっと議論になっていると承知しているが、山上アクセスの有料制の問題である。屋島ドライブウェイは、往復の通行料と山上の駐車場代という考え方で、設立時から料金をいただいている完全な民間会社である。一部国有地を借りて、そのほか私有地などに道路を整備して、維持管理も含めて責任を持ってやっている。その結果、必要となる資金を、道路を使用される方から通行料としていただくという仕組みである。今年の台風で地盤の弱いところが崩れたりしたが、この修理も会社でやっている。無料化となれば、維持管理の面で非常に厳しいところがある。ドライブウェイの経営としては厳しいものの、みなさんの安全の確保についてはきちんと責任を持ってやっている。

無料化の問題とも兼ね合いのある話だが、夜間の通行止めについては、先ほど意見にもあったように安全の意味がある。六甲山の山上への道路は、かつて有料であったが、一部無料になっている。実際、暴走族が多く出没する名所として有名で、無料化前から問題になっていたが、無料化により大きく増えたとのことで、夜間、いわゆる走り屋が突っ走っているというのが実情で、無料化については非常に慎重に考えるべきだと思っている。特に屋島山上は比較的広い駐車場があるので、彼らのマインドからすると非常に使いやすい道路である。六甲山の道路はポストを立てたり、波板のような舗装に変えて、非常に走りにくい形に改修し、コストをかけて安全を確保しているという状況である。そのようなことを見据えて、屋島山上へのアクセスを安全にかつ合理的に実施していきたいということから、今の形になっていると御理解願いた

審議経過および審議結果

い。

(オブザーバー)

屋島に来られたお客さんは、昔は修学旅行でたくさん来られたが、今は、日に5人から10人ぐらいのほんのわずかししか来られないが、昼間来られたお客様も、特に夜暗くなって来られたお客様でも、みなさん、屋島からの景色、夜景を見て、大変素晴らしいと言われる。これは、イベントがどうという問題ではない。屋島の素晴らしい景観はどこにもない。屋島からの景色を見て生活している我々は、どこへ行っても、どこの景色と比べても屋島の方が上だと思う。私自身、本当にそう思っている。山の上で商売をしている方は、今少なくなっていて、10軒ぐらいしかないが、みんな屋島の素晴らしさを感じている。屋島からの景色、麓からの屋島の景色、瀬戸内からの屋島の景色、これらの素晴らしい景色を上手に売れる方法を考えていただきたい。また、廃屋になったり、いろんな面で変化があるが、30年、50年、100年かかってつくってきた屋島を上手に守り育てていくのが一番いい方法だと思っている。

子どものためのイベントなどについて、屋島の小学校から預かっているものがある。毎年、屋島山上で来迎式を行っているが、今年から来迎式に合わせて、屋島小学校の校長先生に協力してもらい、小学校でつくられた「屋島讃歌」という歌をかけた。また、5年生と6年生に10年来毎年、絵ハガキ大の絵をつくってもらっている。本当に素晴らしい来迎式ができた。来年からも、屋島の小学校の子どもたちからの贈り物を上手に生かしていきたい。地元の小学生が一生懸命頑張っているということもわかってもらいたい。

(会長)

屋島活性化の基本的方向性について、非常にたくさん大変貴重な御意見をいただいた。みなさん共通して屋島は素晴らしいと言われており、魅力、多面的価値を改めて確認しないといけないということ、また、大事なことは、特に高松市民の中で、そう思う人を増やさないといけないということである。

また、高松市のシンボルという言い方については、もっとスケールが大きいという御意見も強くあった。もちろん、高松にあるので高松のシンボルとしても大事にするが、この両方の面から、素晴らしいと思う人を増やす戦略などについて具体化していく必要がある。

認知度を高めること、また、素晴らしさについても、廃墟と思っていたものも新しい価値になる、屋島単独ではなく、四国全体のネットワークや、瀬戸内海として活かすなどの意見もあり、そういう可能性も探求すべきであり、その機会としていろんなイベントを活用する方法はあるかもしれない。近くでも、いろいろな新しい試みが様々な形で行われており、そのようなものと結び付けて取り組み、勉強してまとめて見えるものにして、多くの人にその良さを説明して説得しないといけない。

もちろん、王道は景観だという意見もあり、屋島の大切さ、素晴らしさについて、屋島の価値に関する徹底した探求と説明により、ファンを増やすという言い方であったが、広げていくことが何よりも大事なことかと思う。

そのほか、屋島の活性化とは何かということがあった。価値、魅力があることを前提に、それを踏まえた上でどういう活性化を進めていくか、広がりをもどのように持つか、山上部分、コアの部分、もう少し広いエリアに係わる部分とか、あるいはどうい

審議経過および審議結果

う角度から活性化を進めるべきか、これらの点についても多様な角度があると感じたが、それをまとめたものにする必要がある。

いろいろ御意見をいただいて大変勉強になったが、その活性化を、次の基本方針につながる話であるが、どうやって方針化していくかという問題である。

それぞれ単独でやるのではなく、もう少しまとめたものにしていくことが必要ということ、同時に進めるためには解決すべき課題があるということ、これらもたくさんあると思うが議論していかないといけない。

御意見としては以上のような点であったと思うが、そのような御議論を踏まえて基本的方向性をまとめていくということによろしいか。

－了承－

(2) 基本方針（案）について

（資料について説明。）

（事務局）

（４ページ）基本構想策定に当たっての基本方針であるが、基本的方向性で整理した「屋島の位置付け」、「課題」、「進め方」に対応するための基本方針（案）について、黄色の枠内に記載している。

まず、「① 貴重な自然環境や文化財の継続的・体系的調査研究と保全」について、現在の屋島の価値を明確に把握することは、活性化に向けての第一歩である。そのため、屋島の自然環境の学術的調査・研究、寺社・民俗・遺跡などの解明を継続的・体系的に実施し、将来を見据えた屋島の保全を行う。

また、このような屋島の調査は、早期に実施することが重要であると考え、調査実施に向け、現在、協議を進めている。

次に「② 歴史・文化・信仰に富む屋島の再発見」について、歴史や文化、信仰の地として市民に親しまれている屋島は、人々が生計を営んでいる地でもあり、このような独特の環境における屋島の価値の顕在化などにより、魅力を再発見し、屋島にふさわしい整備や活用策を実施していくこととする。

次に「③ 都市づくりと連動した景観の保全と再生」について、市民意識調査等の結果にもあるように、屋島からの景観、また、瀬戸内海や市街地から望む屋島は、人々のふるさとの風景であり、シンボリックな存在である。今後、都市づくりを進めていく上でも、この美しい景観の保全・再生は重要であると考えている。

また、本市では、美しいまちづくり条例や美しいまちづくり基本計画を策定し、良好な景観を保全、形成、創出して美しいまちづくりを推進することとしており、屋島は景観を保全するに当たり重要な地域となっている。

「④ 屋島の有する特性・価値の次世代への継承」について、市民意識調査において、若年層の回収率の低さや、瀬戸内海国立公園、史跡天然記念物指定の認知度の低さ、実態調査による市内からの来訪者数などが示されているように、若い人たちに屋島の価値を伝えていくこと、市民の屋島に対する愛着や誇りを醸成することは、これからの屋島活性化の鍵になるものである。

屋島が本市の貴重な地域資源であることを次世代に継承し、発展させていくことの

審議経過および審議結果

大切さを高松市民全体で共有することが、屋島が恒久的に市民から愛されることにつながると考えている。

最後に、「⑤ 「文化観光」の創造」について、屋島を調査・研究すること、また、屋島にふさわしい形で保存・活用することにより、古くからある屋島の多様な価値に加え、新たな価値付けや魅力を創出し、屋島が知的欲求を満たす地であり、観光の地でもあることを内外にアピールすることが重要であることから、屋島を、本市における「文化観光」の核として保存および活用を図ることとする。

(会長)

基本方針案として5つにまとめている。先ほどの御意見も重なってくると思うが、深めていきたいと思う。どんどん御意見を出していただきたい。

(委員)

先ほどの発言で大変興味を持ったが、屋島の者として、ぜひ芸術祭に、屋島を加えて欲しいというのが願いであるが、実現ができるものであるのか。

(オブザーバー)

私は絶対そうすべきだと思っており、市長にもお話し、いろいろなところで話してみたい。この屋島会議の場でそういうこともありということになれば、私自身はそういう方向で先に進めていきたいと思っている。

(会長)

他にいかがでしょうか。基本方針案ということで、是非御意見をいただきたい。

(委員)

私も、是非、芸術祭に、屋島は参加すべきだと思っている。それには素晴らしいアーティストがこの屋島に来てくれないと人気が出ない。それが一番大事なことで、それをお願いしたい。

(委員)

瀬戸内海は芸術的に有名で、それだけ定評があり、私も面白い試みだと思っている。ただ、市長だけ、あるいは県の観光協会だけの判断だけではいけない。国立公園や文化財保護法の規制もあるので、固定の文化施設を持たないで、期間の問題から、一定期間ということで、事前に十分な打ち合わせをした上で進んでいくと面白いのではないか。

ある種のミスマッチかもしれないが、その面白さが出てくるかもしれないし、それが本来の面白さを浮上させるのに効果的かもしれない。全国各地でも、若手の芸術家に野外の発表の場を提供しているところがある。京都でも府立植物園は秋に1か月くらい展示して、植物園に来るお客さんに芸術を見てもらっている。企画の内容や期間の問題、固定施設をつくるかどうかということなど、十分な事前の打ち合わせを行い細部の詰めができれば魅力を発信できる一つになるかもしれない。

(会長)

基本方針全体についての議論をお願いしたい。

(委員)

資料の4ページ基本方針(案)ですが、景観の観点から、「③ 都市づくりと連動した景観の保全と再生」があることは大変良いことだと思う。屋島の魅力は登って山上

審議経過および審議結果

から見下ろすということもあるが、平地から見る姿も価値があるという意見も出ていた。残念なことに、屋島西町では、建物の高さや色彩的に、屋島の景観となるとどうかというものが現れてきている。具体的には、そのようなところのラインも決めておらず、形やデザイン、色調も違うというところで、景観条例の中でもそこまでいっていない部分がある。守るゾーンとして決めても、屋島に関しては、もっときめ細かくやっておくべきではないか。明るい色でも、屋島の地形に似合うかというのと、白などはすごく浮いており、そういうことにも気付かされた。そのようなことから、この③があるのは屋島の景観を守る意味で有効なことであり賛成である。

(委員)

今の御意見にはまったく賛成で、③はとても大事だと思う。高松のまちづくりとして、屋島を広く見ていく必要がある。①、②があつての③、全体が連動していくものであつて、その見取り図が縦割りということになっていくと難しいのかなという気がする。豊岡市では、景観条例とか文化的景観の保全に関して、部署を超えて行ったり、まちづくりには文化財がベースにあるということで、まちづくり課をつくっている市もある。

基本方針として、①と③が連動しないと未来はないと思う。単に保全してしまつては、それをどのようにアピールしていくかという部分につながっていかない。この基本方針の①から⑤は、個別はいいと思うが、これを総体として、この黄色い枠組みがどのようにまとまっていくのかという部分をもう少し明確にする形で方針をつくれればいいのではないか。一番下の⑤は、①から④があつての⑤なのか、1ページ目の最終の目的として、「文化観光」の創造があり、これとの関係はちょっとよくわからない。

①、②については、オブザーバーの方の発言にもあつたが、国立公園で、名勝的要素もあつて、史跡であるという、屋島しかないという部分、これは①に係わってくると思うが、ここの方針が基礎にある。発信しなければならない情報が、学術の方にもあまり蓄えられておらず薄っぺらなもので、それは一部の盛り上がりで、観光では40年代50年代は大丈夫だったかもしれないが、そこのベースがなかったから今落ちてきていると思うので、そのベースをしっかりとすることである。それはここに書かれてあるものでは、体系的調査研究、歴史学的分野や自然工学系になってくるだろうが、それは個別ではいけない。体系的に屋島の全体的な魅力という部分で、この体系的調査があるというのはとてもいいと感じている。

先ほどの芸術祭は、⑤の「文化観光」の創造に直結する部分だと思うが、本来的には芸術家、若手のアーティストが来て、屋島の50年前にあつたような強烈なインスピレーションを、今、若手の方が受けてどういう芸術作品になるかということがあつて、その作品の場の提供ということだと思う。展示期間の問題もあるものの、芸術祭は良いと思うが、屋島から何を受け取るのかという部分での文化観光の創造、その基礎としての①が大事だと思う。

(委員)

④で、次世代への継承ということがある。教育委員会の方から指導していただいて、小・中・高等学校の教育の研究の場として、子どもたちに、屋島はどんなものなのかということ各自に研究させるという課題を与えて、地元屋島に対する意識を高めて

審議経過および審議結果

いかないといけない。大人が言うよりも、子どもたちは小さいときに研究したイメージが残ってくる。親もその研究を手伝うためについて来る。高校生になるともっと詳しい研究になるが、屋島を、研究課題、題材として子どもたちに提供して、夏休みの研究などの形で、学校研究の場としていけばどうかと考えている。

(委員)

先ほどの屋島の小学生の絵の中には、史跡の絵、名勝の絵、国立公園の絵もある。実は子どもたちは気付いている。認知の問題で、高松市民なら誰でもが知っていて、潜在的な知識はあるのではないか。それを①なり、②なりに活かしていく部分として、多島海もあり、史跡、源平合戦もある。琴電など、アクセスの部分もきちんとある。潜在的な価値は市民の方にはあるのだろう。それこそが屋島の最大の魅力であり、シンボルだろうと思う。そういうことが、④、①、②に加わっていくだろうし、それが引いては、まちづくりの方にもという連続性、方針へのつながりをもう少し大事にしたい。

(委員)

大学関係の方にも、芸術祭ができるときにはボランティアをしていただいて、芸術祭ができなくても香川大学のジオパークなんかも一緒にやっていけたらいいと思う。小・中・高校生、大学生もぜひ屋島の方に目を向けてもらいたいと思っており、やはり屋島に関する教育だと思う。

(会長)

他にございませんか。

基本方針案については、先ほど御意見をいただいた、屋島学というか、屋島を全体としてどういう価値があるかとか、学術的にもやっていただくということで、これは体系的調査ということになっている。同時に、子どもたちや市民も参加して、自分の思っている屋島を書くということをする、潜在的に持っている価値意識が現れてくるのではないかと。書くことはいいことで、文字にするとか、歌にするとか、表現方法は多様でいろいろなやり方がある。

(委員)

今いろいろなところでやっている検定試験をやればいい。一つのやり方として興味を持ってもらえる。

(委員)

昭和9年から動いてないなど、いろいろ言われていたけれど、何が出来ないのか、ネックになっていることを、改めてみなさんと考えて、それを取り除こうというのがこの屋島会議の本来の姿だと思っている。行政の方も来ており、今までできなかった理由をどんどん掘り出して、どうやったらできるのか、その方向はどうあるべきなのかという、規制とかいろんなものにとらわれず、どんどんやっていきたいと思っている。

(会長)

先ほど基本的方針のところでも言ったが、屋島の良さ、素晴らしさ、価値、いろんな意味付けみたいなのについて、客観的、学術的なことをやると同時に、みんなが思うところにつながる取組みを行うことによって、納得したり、発見したりする。そういうことを通じながら、歴史、文化などを、教え込まれるのではなく、自然に出て

審議経過および審議結果

くるものにしていく。そのようなことを大事にしながら、御指摘のように、①から④をバラバラではなく、一緒に取り組んでいくという、屋島学とはそういう意味だと思う。屋島の自然科学、人文科学ではなく、屋島学というまとめ方をするが、とても大事な話だと思う。これは推進体制についても御意見がかなり強くあり、基本方針としてもそのことを意識して考えてもらった方がよい。

①から④を受けて、⑤になるということもあり、それらも含めて、全体として意識的に追及することと、これから具体的にできると、いろいろな障害、実行するのに難しい問題が出てきて、それも全体としてどう解決していくかということにも関係してくる。ここに個別に書かれていることは全然間違いではなく、是非、まとめ方について基本方針の中でも位置付けた方がいいのではないかと。

そのようなことで取りまとめさせていただくということによろしいか。

—了承—

(会長)

ありがとうございました。それでは、議題3の「その他」ですが、この際、御意見があればどうぞ。

(特に意見なし)

(事務局)

先ほどから、調査などの話が出ているが、市としても屋島の調査は早期に実施することが重要であると考えており、本日、御出席いただいている増田香川大学工学部長を中心として、先にできる調査を実施する方向で現在協議を進めている。

次の会議は、3月上旬を予定している。

(会長)

本日、基本的方向性、基本方針が確認されたので、次回は、中間報告案の取りまとめということで進めさせていただく。

以上で第3回の屋島会議を終了する。

—議事終了—